

中長期目標 (学校ビジョン)	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切にして知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。	今年度の 重点目標	1 基礎・基本の定着と学力の向上 2 基本的生活習慣の確立 3 地域連携と特色ある教育活動	4 進路意識の向上と進路保障 5 コミュニケーション能力の向上 6 業務改善の取り組み
-------------------	---	--------------	---	---

年 度 当 初						評 価 結 果（最終）	
評価項目	評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
1	基礎・基本の定着と学力の向上	・ 全体的な基礎学力の向上と学習意欲の向上（進路・教務）	・ 基礎力診断テストの評価（GTZ）において、下位層の生徒が少なくなく固定化している。上位層の生徒は年度をとおして大きな変化がみられなかった。	・ 指標として、基礎力診断テスト（1・2年生）におけるD3の生徒が45％を切り、上位層の成績が安定し、全体の学力が向上している。	・ 家庭学習時間調査を年2回、基礎力診断テストを年3回学期始めに実施し、One week 問題集、弱点克服プリント等を活用して基礎学力の定着を図る。 ・ 朝学習・基礎学力テストを検証し、また基礎学力テストの表彰制度を継続するなど、実施方法の改善に努める。	・ D3の割合 4月→9月 【1年生】55.3％→50.7％ 【2年生】54.3％→44.1％ ・ 2年生上位層は大学一般入試で合格が目指せるB3以上のレベルが3名で、4月からほとんど変化が見られない。	C ・ One week 問題集や朝学習の時間を活用して基礎学力の定着を図る。 ・ 朝学習・基礎学力テストの内容を検証し、実施方法等の改善に努める。
		・ 授業改革の取組の推進（教務）	・ 各教科・科目で公開授業が実施され、協同学習の授業実践・授業研究は進んでいる。協同学習の手法による授業改革が徐々に実践されつつある。	全ての教科・科目でコロナ感染症対策をしつつ、協同学習の学習内容、実施方法を検討して行う。	・ 全員が協同学習をテーマとした公開授業を行い、授業改革に取り組む。 ・ コロナ感染症対策を考慮し、各科・各教科（2教科程度）ごとに小グループに分けて公開授業を実施する。	・ 協同学習研修会を感染症対策を徹底し実施した。 ・ 協同学習をテーマとした公開授業は、全員実施の目標は達成されていないが、定期的なICT研修がされたことにより、ICTを活用した協同学習の授業など来年度を見据えた授業が実施された。	C ・ 学習指導委員会等で協同学習の実施計画を立てる。 ・ 新入生に対応したICT研修の実施。
		・ 成績上位者へのサポート体制の充実（進路）	・ 3年生で農業系大学進学を希望する生徒5名を含む進学希望者が約30名おり、大学進学研修プログラムの参加案内や個別指導を開始している。 ・ 1・2年生については、担当者はまだ決定していない。	・ 3年生進学希望者の進路希望が実現されている。 ・ 1・2年生の進学希望者に対する継続的な学習支援体制が実現されている。	・ 進学希望者への指導体制を確立するとともに、進学希望者(成績上位者)に対する個別指導を実施する。 ・ 2年生のコーディネーターを配置し、進学希望者に対して早期に個別の指導体制を構築する。	・ 3年生の進学希望者に対する個別指導を充実させることで、大学進学者を増やすことができた。（昨年度4名⇒今年度6名） ・ 教職員を対象とした小論文指導研修会を企画し、小論文・志望理由書作成の指導力向上につなげた。	B ・ 進学希望者に対する個別指導を継続させる。 ・ 1月に実施した希望調査を基に生徒の進路希望を把握し、早期に個別の指導体制を構築する。
2	基本的生活習慣の確立	・ 挨拶指導の徹底と頭髪・服装規定を守る取組の推進（生徒指導）	・ 分離礼がかなり浸透してきた。 ・ 8割強の生徒が頭髪・服装規定を守っている。2割の生徒は毎月の服装検査後に改善をしている。	・ 全員が常に分離礼による挨拶ができる。 ・ 常に服装規定を守り、安定感のある生活態度で過ごしている。	・ 全教職員の共通理解のもと、授業、清掃、農場当番、部活動等あらゆる場面で分離礼を徹底する。 ・ 毎月の服装検査の実施と事後指導の徹底。 ・ 担任、学年団、学科、生徒指導部の連携を密し、段階的・組織的指導を行う。	・ 自発的にあいさつをする生徒が増加した。 ・ 分離礼は浸透してきた。 ・ 4月から1月までの10回の服装検査で11.8％の生徒へ服装改善の文書を出した。昨年より0.9ポイント減少した。	B ・ あらゆる場面での、あいさつ、分離礼の徹底をする。 ・ 情報を共有し、学年団、学科、分掌の連携を深めた指導を行い、生徒の自律心の向上を図る。 ・ 服装検査基準の徹底と日常的な声掛けを、全教職員で行う。
		・ 教育相談・特別支援教育担当を中心とした組織的取組の推進（環境保健）	・ 自己理解・他者理解の意識が進んでいない生徒に友人とのトラブルが発生しやすい傾向がある。 ・ QUの結果において、非承認群・不満足群・要支援群に分類される領域に学校生活に対する意欲の低い生徒が見られる。	・ 自己理解・他者理解が進み、より良い人間関係作りができるようになり、生徒アンケートの「私のクラスは自分にとって過ごしやすい場所である。」の割合が7月に比べ12月が上昇している。 ・ QUの結果において、生徒の学校生活意欲平均得点が第1回目検査より第2回目検査が向上している。	・ 新入生全員面談と2.3年生の面談、職員による生徒観察とおして、生徒の実態把握をし、より実態に即した学習支援・生活支援をする。 ・ 校内職員研修会を実施し、QU等を活用した教師の生徒対応のスキルをアップさせる。	・ 1年生の全員面接を実施し、生徒の現状把握と適切なアドバイスができた。 ・ 自己理解・他者理解LHRは、クラスの人間関係づくりの一助となった。 ・ 職員研修を予定通り実施し、支援を必要とする生徒の共通理解が進んだ。 ・ QUを活用した研修を行い各クラスの分析が深まり、クラス運営に活かすことができた。	B ・ 1年生の全員面接の継続 ・ 校外専門機関との連携の継続 ・ 職員研修の充実 ・ QU研修を早い時期に行う
		・ 明るく活発な中での規律ある寮教育の推進（寮）	・ 寮内の美化に努める生徒は多いが、自室の整理整頓を苦手とする者が多い。 ・ 日課に自習時間を設けているが、成績の向上に自信を持っていない生徒がいる。 ・ 寮生会活動に責任感を持って取り組む一方、運営の方法や手順がわからず、教員に頼りきりになる場面がある。	・ 日頃から各自の机上およびその周辺を片付け、自己管理能力が向上している。 ・ 基礎学力テストの成績が毎回6割以上となっていることで、日頃の学習や進路実現に自信を持って取り組んでいる。 ・ 行事の企画段階から教員と意見を交換し、自主運営ができている。	・ 環境委員会と生活委員会の巡回に加え、舎監から個別に指導・助言する。 ・ 教科と連携し、課題プリントを作成し実施する。 ・ リーダーや役割分担を明確にし、自主運営のための助言やサポートを行う。	・ プリント類を本棚に収納したり、机上に置かれた洗濯物を片づけようと努力している。 ・ 基礎学力およびF F J 検定の課題プリントに取り組ませた。基礎学力テストの成績は、当初の目標より高い平均7割となった。 ・ 行事運営に積極的にかかわろうとしている。自らの役割以外にも手伝おうとする姿勢が見られた。	B ・ 居室の点検回数を増やし、改善に向けた助言を継続する。 ・ 得点が伸びない生徒に対し、個別に課題を追加する。 ・ 集団行動の中で、自発的な行動がとれる態度を醸成する。
		・ 各科の特色づくりと魅力の発信（農場）	・ 生物科は特色の一つである乗馬交流会が開催できなかったが、本県唯一の畜産に関する学習は基礎基本を重視しながら継続できている。また、地域への普及を目指す青バパイヤ栽培は特色ある取組として認知されてきた。 ・ 食品科は米の食味鑑定会での入賞、いのこつラーメンの開発、スマート農業の実践、学校内外における販売実習などが特色ある取組として認知度も高い。 ・ 環境科はJ R倉吉駅の草花装飾や草花交流などが特色ある取組として継続している。これらの成果がテレビ、新聞などマスコミに多数取り上げられ、生徒の達成感や自己肯定感につながっている。	・ 地域に定着した取組を継続しながらも時代のニーズにマッチングした特色ある取組、例えばSDGsを意識した活動を実践している。 ・ 調査・分析を中心として、より科学性を高め、地域農業への貢献を視野に入れたプロジェクトに取り組んでいる。 ・ 昨年同様特色ある取組をマスコミへ情報提供、地域へ発信することによって、生徒の自己肯定感や達成感がより一層高まる。 ・ ウィズコロナ時代にも対応した、新しい様式の農業教育を実践している。	・ 各科の特性に基づいた課題研究を推進し、特色ある取組を地域振興につなげる。 ・ 地域貢献に加えて環境問題などグローバルな視点を持った課題研究を実践する。 ・ SDGsについての教職員の意識および知識を向上させる。 ・ ウィズコロナ時代を想定し、オンライン学習などを取り入れた新しい農業教育のあり方を模索する。	・ 生物科はコロナ禍においても感染対策を取りながら可能な限り乗馬交流を実施した。また、地域への普及を目指す青バパイヤプロジェクトは、1,200本の本校産苗の供給により県内生産者数（約60軒）の増加が見られた。 ・ 食品科はお米甲子園における7年連続の入賞やスマート農業の実践、のこう市場や北谷販売など地域に認知されている取組を続けている。 ・ 環境科はJ R倉吉駅の環境整備や草花交流など、地域貢献につながる取組を継続している。 ・ これらの取組は新聞やテレビなど多くのマスメディアに取り上げられ、本校の魅力を充分に発信することができた。	B ・ 科学的裏付けのあるプロジェクトを進めていくために、関係機関（産業技術センター、保健所、大学、短期大学、農業大学校、農業試験場など）との連携を一層進める。 ・ 特色ある取組をマスコミへ情報提供、地域へ発信し、生徒の自己肯定感や達成感をより一層高める努力をする。 ・ SDGsを意識した取組をプロジェクト研究に取り入れる。

中長期目標 (学校ビジョン)	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切にして知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。	今年度の 重点目標	1 基礎・基本の定着と学力の向上 2 基本的生活習慣の確立 3 地域連携と特色ある教育活動	4 進路意識の向上と進路保障 5 コミュニケーション能力の向上 6 業務改善の取り組み
-------------------	---	--------------	---	---

年 度 当 初					評 価 結 果（最終）			
評価項目		評価の具体項目	現状	目標（年度末の目指す姿）	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
3	地域連携 と特色ある 教育活動	・ 農業の6次産業化の取組の推進（農場）	・ 県版HACCP取得しているウイナーソーセージの食肉加工実習を中心に行うことによって生徒の衛生意識が高まっている。 ・ タマネギ、ジャガイモ、ニンジン、シロウリなど原材料を生物科で生産し、食品科での加工実習や製造会社への納品を行い、学科間連携を実施している。 ・ 食品衛生コンサルタントを交えた研修を積み上げ、食品安全マネジメント規格（JFS-B）の取得を目指している。	・ 本校の特産品（米、新甘泉梨、青パパイヤ）を原材料とした校内6次産業化が進み新商品の開発が進んでいる。 ・ 鳥取県版HACCPに加え、より学校教育現場へ適合する食品安全マネジメント規格（JFS-B）を取得し、安心・安全な加工食品を生産することで生徒の衛生意識が向上している。	・ 施設自体で複数の製品について認証される食品安全マネジメント規格（JFS-B）の取得のために食品衛生コンサルタントとの連携を密にする。 ・ 学科間の職員の意思疎通や生徒同士の連携に努め、校内6次産業化を目指した取り組みを進める。	・ 外部機関との連携を取りながら新商品開発を進め、青パパイヤを使った清涼飲料水やリキュールの商品化やカレー福神漬が市販された。 ・ JFS-Bの取得について最終段階になっており、今年度中の取得の見込みがついている。	B	・ 引き続き青パパイヤ普及に関する取組を継続し、生物科と食品科の連携によって校内6次化による本校オリジナル商品の開発を目指す。 ・ JFS-B取得を地域に発信し、それに基づいた衛生管理やリスクマネジメントの実践を目指す。
		・ 学校からの情報発信の推進とPTA活動の活性化（教育支援）	・ 学校の様子を家庭・地域へ情報発信しているが、十分に伝わっているとは言い難い。 ・ P T A活動への参加者は、総会への参加者数の推移から考えると一定数ある。	・ ホームページ（HP）を積極的に更新し、行事の様子など本校の活動が広く認知されている。 ・ 保護者等が積極的にPTA行事に参加している。	・ 教育支援部が毎週1件以上（年間35回以上）の記事をHPに掲載する。 ・ 部活動の様子を部顧問がHPにアップする。 ・ 保護者への情報伝達手段として「まち c o m iメール」を活用する。 ・ HP掲載方法に関する校内研修会を開催する。	・ 報道機関に積極的に情報提供し取材の依頼を行った。 ・ 教育支援部が行ったWE Bの更新は23件（全体では77件。約30％。昨年同期は教育支援30件。全体では91件。32％）であった。 ・ 全保護者への文書は生徒を通して配付、役員あての文書はすべて郵送した。どちらの文書もほぼメール配信サービスでも行った。 ・ WE B掲載促進の研修会は持てなかったが、顧問には随時記事掲載方法を個別に伝えた。 ・ 倉農祭バザーは中止となったが、技術を継承するため試作会を行った。 ・ 学校WE Bへの行事予定の掲載が不十分であった。	B	・ 引き続き、報道機関に積極的に情報提供し取材の依頼を行う。 ・ 教育支援のWE Bの更新は基本的に、週1度以上行い、このペースで校内行事等を更新する。 ・ 業務分散化のため各行事等のWE Bページへの掲載は各担当者が行う。 ・ 業務効率化のためP T A会員にメール配信サービスを利用し情報を提供する。 ・ 学校WE Bに月間行事予定表を掲載する。
4	進路意識 の向上と 進路保障	・ 早期からの進路意識の啓発と進路指導の充実（進路）	・ 昨年度の進路決定率は100％であった。進路選択の見極めの不十分な生徒が就職に苦戦した。 ・ 2・3年生にも進路希望先が未定の生徒が一定数存在する。	・ 早期からの計画的な準備により進路目標を達成し、進路決定率を100％にする。 ・ 進路ガイダンス等をととして、生徒の進路意識の高揚を図り、年度末には2年生の進路希望が確定できるような進路指導を行う。	・ 早期に適切な進路決定がなされるよう、引き続きガイダンス、個人面談、個別面接指導等に力を入れると同時に、進路行事やL H Rなど見直しを行う。 ・ 早期の定着指導、職場開拓を実施し、進路先の開拓を進める。 ・ 地元の大学見学等を実施し、進路意識の高揚につなげる。	・ 個人面談や面接指導など全職員の協力により、年内での就職内定率100％を達成することができた。 ・ 進路行事については、6月の進路ガイダンスを学校独自に実施したり、卒業生による講演会を日程変更して行うなど、社会状況に応じた柔軟な対応をとった。 ・ 1、2年生の進学希望者を対象とした鳥大農学部見学会を実施し、進路意識の高揚を図った。	B	・ 引き続きガイダンス、個人面談、個別面接指導等に力を入れる。 ・ コロナ禍においても生徒の進路意識向上に向けて進路行事やLHRの工夫・充実に取り組む。 ・ 継続して進路先の開拓を進める。
		・ 資格取得者増加に向けた取組の推進（農場）	・ 農業学習の到達度の指標となるFFJ級位検定の合格者は、初級位に47名（合格率46％）、中級位29名（同25％）、上級位18名（同82％）である。上級位検定以外の合格者数、率ともに前年を下回っている。 ・ 多くの資格検定が中止や延期になり、各種資格検定の合格者数延べ人数は263名で昨年の324名を下回っている。 ・ 本県初となるアグリマイスタープラチナ1名、ゴールド3名、シルバー4名、農業技術検定2級1名、測量士補1名の認定など、難易度の高い資格の合格者が見られる。	・ FFJ検定初級の合格率60％以上、中級の合格率40％以上、上級位検定合格者数は25名以上、合格率85％以上。 ・ 各種資格検定の合格者数のがべ300名以上であり、アグリマイスタープラチナ認定者、農業技術検定2級、測量士補などの合格者数が昨年以上である。	・ FFJ検定の意義をことあるごとに説明し、生徒のモチベーションを高める努力を続ける。また級位検定の意義や学習方法などを教員が一丸となって指導する。 ・ 級位検定の実施日を定期考査と別日にしたり、寮生は自習時間を級位検定の事前学習に充てるなど、集中して勉強できる日程を確保する。 ・ 実物鑑定資料の作成と活用を進める。 ・ 農業技術検定問題集やテキストを活用して出題傾向を分析、把握した上で教科内においても学習指導をする	・ FFJ級位検定の合格者は、初級位62名（合格率53％）、中級位23名（同26％）である。年度当初の目標は下回っているが、昨年の実績を上回っている。 ・ 各種資格検定の合格者数延べ人数は278名であり、昨年の263名をやや上回っている。 ・ 最難関であるアグリマイスタープラチナが前期で認定されたことは特筆に値する。また、後期認定者1名と合わせると2名であり昨年の実績を上回っている。	B	・ 農業クラブについて「農業と環境」の中でできるだけ早期に取り上げ1年生の動機付けをする。また、普通科教員の力も借りながら級位検定の意義や学習方法などについて教員が一丸となって指導する。 ・ 寮生に関しては自習時間を利用して級位検定の事前学習に充てる。 ・ 図書館にある農業技術検定問題集、テキストを活用して出題傾向を分析、把握した上で教科内においても学習指導をする。
		・ 農業や地域を支える人材の育成（農場）	・ スーパー農林水産業士に4期生5名が認定され、4年連続で1名鳥取大学へ進学した。また本校として久しぶりに公立鳥取環境大学へ1名進学した。現在、5名が5期生の認定を目指している。 ・ 就農促進研修会に1年生5名（7）、2年生6名（9）名、3年生7名（5）の合計18名が参加した。（ ）内は昨年の人数。 ・ 就農する生徒は昨年に比べ減少したが、一定数存在している。 ・ 昨年に比べ農業関連の進学・就職割合（38.6％、32名/83名）が微増した。（R1：35.6％、26名/73名）	・ スーパー農業水産業士5期生が誕生し、鳥取大学農学部へ5年連続進学する。また、公立鳥取環境大学への進学者がいる。 ・ スーパー農林水産業士のしくみ、利点や、各学科の取組を今まで以上に県内外の中学校へ情報発信することで入学希望者が増える。	・ スーパー農林水産業士育成プログラムに則ったカリキュラムを確実に実施し、就農意欲喚起に関わる行事に積極的に参加させるとともに、新たにスーパー農林水産業士を目指す生徒を増やす。 ・ 4年生大学への進学希望者の基礎学力を高める取組を継続し、特にプロジェクト研究に重点をおいて主体的に取り組ませる。 ・ 各学科の魅力ある取組をSNSを利用して県内外に発信し、中学生および保護者の興味・関心をもたせる。	・ スーパー農林水産業士の5期生が5名が認定され、2年生5名が来年度の認定を目指している。 ・ スーパー農林水産業士認定者のうち、5年連続で1名が鳥取大学へ進学した。また2年連続して公立鳥取環境大学へ1名進学した。 ・ 農業関連の進学・就職割合（42.2％、35名/83名）が微増した。（R2：38.6％、32名/83名）	A	・ スーパー農林水産業士育成の認定希望者のうち、大学進学を目指す生徒について、食の6次産業化プロデューサー育成講座レベル2の認定を勧める。 ・ 農業自営を目指す生徒を増やすために、農業の楽しさ、やりがいを感じさせる座学、実習を一層実践し、特に1年生に対してはスーパー農林水産業士の意義や利点などを伝え、候補者を選抜する。
		・ 生徒会活動と部活動の活性化（生徒会）	・ 生徒会活動に主体的に関わろうとする生徒が増えている。一方で生徒会活動に無関心な生徒も見受けられる。 ・ 年間を通して活動している部活動が限られている。	・ 生徒会執行部の具体的な活動を通して、全生徒に生徒会活動の意義を認識させる。 ・ 中国大会と同程度の大会に出場する部が、文化系体育系を合わせて3部以上となる。	・ 生徒会執行部が中心となって、生徒の意見を反映した新たな活動に取り組み、その経過・結果を全校生徒に分かりやすく示す。 ・ 全校集会、表彰式、壮行会、一斉部会等を充実させることにより、部活動に対する意識の高揚を図る。	・ コロナ禍による生徒会活動・行事がいくつか中止となったが、それ以外の活動で生徒会執行部を中心に生徒の主体性が育ってきた。 ・ 中国大会以上の大会に4部が出場した。	C	・ より多くの生徒の意見を取り入れるため生徒会執行部会を定期的に行う。 ・ 来年度新入生においても積極的に部活動の奨励を行う。

